

# 現代のこころば



やまだ しょうじ  
山田 奨治

小学校六年生や中学校三年生の教室で、授業が難しくなるケースがあると聞く。一部の子どもが教師のいうことを聞かなくなり、授業中に仲間が集まって遊んでいたり、教室から抜け出しては他のクラスに侵入して授業を妨害したりする。教師が注意すると暴言を吐く。勉強に落ちこぼれているからではない。学力が優秀で難関校の受験を目指している子どもにも、そんな行動がみられるという。

小中学校は、上の学校へ進むために行くものではない。未来を担う子どもたちが、最低限、身につけてはならない、社会で生きる基本を学ぶ場所だ。そうした力は入試の点

## 崩壊する教室

でも、いま大流行の「学力の国際比較」のスコアでもあらわすことができな。教科書どおりの学習でもドリルの反復学習でも身につかないのだ。指導力のない教師がいることも事実だろう。しかし、心ある教師の多くは、子どもが成長する大事な時間にかかわっていくことに、情熱と使命感を傾けている。

日本の学校には欧米のそれとは異なる役割があるようだ。五年前にイギリスに滞在していたときに、近くの町で小学生の女の子が何者かに殺害されるといふ恐ろしい事件が起きた。メディアのインタビュは、地域の牧師のところへ殺到していた。これが日本だったなら、メディアが向かう先はまちがいがなく小学校の校長先生のところだ。つまり、地域の中心や道徳のよりどころ、人格形成の場といった、本来ならば宗教が担うべき役割を、日本の学校は担っている。だからこそ、受験産業が決して取って代わることのできない価値が、学校教育にはあるのだ。

この部分は公開に適さないため削除されています。

わたしたちは、どのようなひとたちに次代を担ってほしいのか、具体的なイメージがあるのだろうか。ひとによってそのイメージは少し違ってもよい。だが、いくら勉強ができて、傍若無人で礼儀知らずで、は駄目なことは、はっきりしている。それを子どもにきつぱりと示していかなければならない。親や教師だけでなく、地域のひとびとや受験産業も、子どもを導くことには等しく責任を負っている。

わたしも小学校の集団登校の交通指導のために、黄色い旗を持って横断歩道に立つことがある。地域の子どもひとりひとりの顔をみながら、「おはよう」と声を掛けるのだが、わざと顔をそむける子が珍しくない。やるせなさと、この子たちがこのまま大人になってしまうことへの不安を感じずにはいられない。

(国際日本文化研究センター准教授 情報学)